特集 日本一づくり

三、000段の石段のソフト展開を

地域づくりアドバイザー
浜野商品研究所部長　村山友宏さん

中央町の日本一の石段づくりが、マスコミのギネスブック的興味を誘い、一つの話題になったという意味では、意義があったと思います。ただ、追求すべき点は、量ではなくて、質だと思います。

石段は、歩行空間であり、生活道路であって、単なる機能本位の業務道路ではありません。誇りにすべきことは、長い階段をつくったということではなく、みんなが心豊かに楽しめる階段にするということではないでしょうか。また、そうでなければ、今の時代では広く人々の共感を得られないと思います。

一例をあげれば、「鍛練の道づくり」、「景観を楽しむ道づくり」それに「道すがらを楽しむ道づくり」など様々な工夫が考えられます。

とにかく、階段というのは、誰でも「しんどい、疲れる、イヤだ」というイメージがあります。特に、女性には敬遠されるでしょう。だからこの石段は、単なる階段ではなくて、ステージであり、観客席だというイメージをつくりあげる必要があります。

三、○○○段の石段づくりは、このように総合的、多角的な観点から開発されるべきであって、土木事業的な日本一をめざすことに終わらないよう留意することが肝要と考えます。

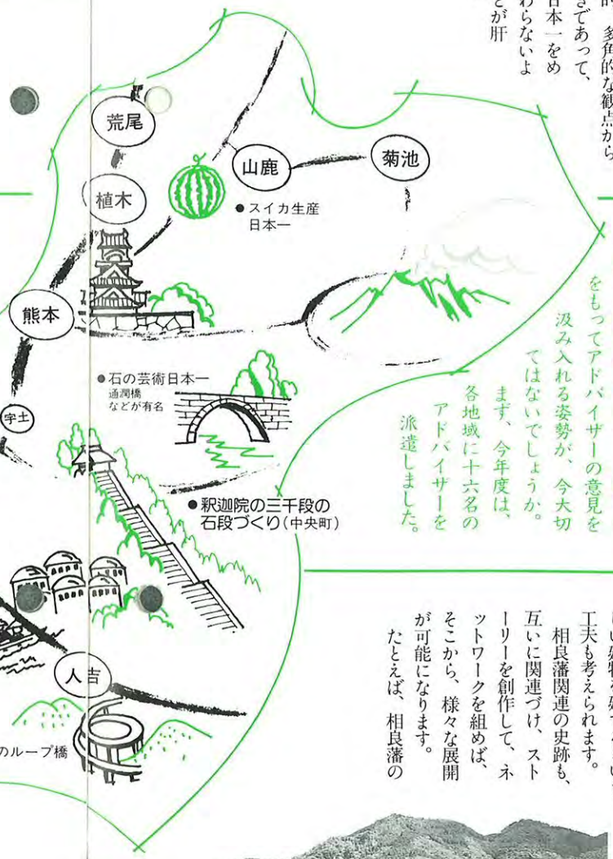
地域づくりアドバイザー設置

「くまもと日本一づくり運動」の提唱をきっかけに、各地域では、それぞれ日本一づくりを目指して努力がなされています。

県では、各界の専門家に地域づくりアドバイザーとして、実際に地域を見てもらい、アドバイスを受けることにしました。地域に利害関係のない方々の意見は、既成の固まった考え方に捉われず、自由な発想や客観的なものの見方ができ、貴重なものです。

もちろん地域づくりの主体は地域の人たちです。地域の自立自助の精神が欠かせないことは、言うまでもありません。しかしながら、地域の知恵には限界があります。三顧の礼をもってアドバイザーの意見を汲み入れる姿勢が、今大切ではないでしょうか。

まず、今年度は、各地域に十六名のアドバイザーを派遣しました。



球磨川下りにひと工夫を

地域づくりアドバイザー
渡辺豊和建築工房
渡辺豊和さん

地域づくりの活力は、発想の転換から生まれてくるものではないでしょうか。

球磨地域を観光振興として見た場合、球磨川下りと球磨川沿いの相良藩関連の史跡を積極的に活用することが必要なのではないでしょうか。

球磨川下りにしても、ライン下りで、古城や教会が川岸に見え、建築物の観賞ができるように、球磨村の球泉洞森林館のようなユニークで楽しい建物を建てるという工夫も考えられます。

相良藩関連の史跡も、互いに関連づけ、ストーリーを創作して、ネットワークを組めば、そこから、様々な展開が可能になります。

たとえば、相良藩の栄枯盛衰を小説化するとすれば、それを劇化し、その背景として史跡を効果的に活かすことができるし、それがきっかけとなって、地域に演劇熱が起こり、地元グループにより上演される可能性もでてきます。話がかなり飛躍しているかもしれませんが、このように、人々が知恵を出し合って、既成概念のカラを破ってこそ、本当の地域の活性化が図られるのではないでしょうか。

根っこの部分で共感

北海道地域づくりリーダーに同行した
北海道庁地方振興課
町田真英さん

今回の訪熊では、色々な意味で、意義のある交流ができました。中でも、中央町町長の、桁外れの発想、そして、なんといってもあの熱意には脱帽です。また、球磨のあの急峻な土地、植林するにしても、決して豊かな土地とはいえない地域で、森林館を作ったことなど、球磨森林組合の杉谷さんのお話も、興味深く拝聴しました。このほか、水俣の福田農園。近くに、人口の多い都市が控えている訳でもなく、余程の魅力がなければ、人が集まって来そうにない条件の中で、しっかりした経営感覚で様々な難事にチャレンジする福田さんの姿は、これからの地域づくりには欠かせない気迫を感じました。

北海道と熊本。北海道は今七○%の市町村が過疎で、地域の活性化を図るということは切実な課題なのですが、比較的豊かな土地柄の熊本で、このように地域づくりが盛んだというのは素晴らしいことですね。

遠く南国へやって来て、風土や、やっていることがそれぞれ違っても、共に、根っこの部分で、共通の意識の存在を実感し、非常に心強く思いました。うちの青年リーダー達にも大いに励みになったと思います。

今度は、みなさまのおいでをお待ちしております。

北海道「一村一品運動」地域リーダー訪熊

この度、北海道各地の若手地域リーダーと道庁関係者計十九名が「くまもと日本一づくり運動」の研修を行うため、八月二十七日から三十一日までの五日間来熊しました。

一行は、熊本の各地で地域づくりに積極的に取り組んでいる姿を見学し、夜は、宿舎等で地元のグループと焼酎を汲みかわしながら、自由な意見を交換する「夜なべ小屋交流」に参加しました。

又、最終日には、県下全域の地域リーダーを一堂に集め、北海道、熊本それぞれの代表者数名による体験談の発表、発表者をパネラーとするパネルディスカッション、引き続くパーティなど、研修の成果と反省などが話し合われました。

「くまもと日本一づくり運動」と「北海道一村一品運動」、二つのいずれも地域の活性化をめざしたグループの新しいネットワークができあがりました。

地域おこしは行動から

北海道地域づくりリーダー
訪熊団団長　坂東裕美さん

地域の活性化といえば、物質的に満足するとか、環境整備ができるとか考えがちですが、本当に大切なことは、参加するみんなが「俺はこの町でこういうふうに生きているんだ」そして「俺は、この町に住んで良かったなあ」という気持になることであろうし、そういうものが地域の活性化につながるのではないでしょうか。

今、熊本では、日本一づくり運動が展開されていますが、このような運動では、自分だけは参加しないで済むような言い訳を考える人がいますが、そんなことではだめなんです。自分がそこに参加して、どのような活動をするのか考え、行動することが、ひいては、自分の存在価値を見出すことになるのではないでしょうか。

日本一づくり運動という形で、県民が、一丸となって目標に向かって行けば、きっと素晴らしいものになるでしょうし、そこから派生する様々な問題を、みんなで考えることによって、ほんとうに活力に満ちた熊本が実現するのではないでしょうか。

熊本の夏みかんも、北海道で食べることが出来ますし、私共のチェリーも、熊本の皆さんの口に入ることになりました。この出合いと物の交流を契機に、地域づくりのソフトの交流ももっと深めていきたいと思っています。